

笹川保健財団 地域啓発活動助成

2022年 4月 7日

公益財団法人 笹川保健財団

会長 喜多悦子 殿

2020年度地域啓発活動助成
活動報告書

標記について、下記の通り活動報告書を添付し提出いたします。

記

活動課題

へき地の在宅緩和ケア・終末期ケアへのアウトリーチ支援

活動団体名： やまと在宅診療所登米、東北大学大学院医学系研究科緩和医療学分野 講師

活動者（助成申請者）名： 田上恵太

1. 活動の内容・実施経過

本助成を受諾した、やまと在宅診療所登米は、宮城県登米市で自宅療養中の患者のうち、訪問診療・往診を必要としている患者に在宅医療支援を行っている。がん・非がん患者関係なく介入を行い、患者・家族の希望があればがん終末期の患者をはじめとした自宅や社会福祉施設でのお看取りも支援可能である。また登米市と共同し、地域医療従事者・福祉従事者だけではなく、地域住民に対する地域医療の啓発事業などを展開している。

また東北大学大学院医学系研究科緩和医療学分野と協働し、へき地への緩和ケアアウトリーチサービス効果の測定研究を行っている。診療機関に専門家が定期的に訪問し共に診療に関わることにより、地域の医療従事者のスキルや知識が向上すること目的とする活動をアウトリーチサービスと呼ぶ。緩和ケアは地域での普及が求められているものの、へき地を中心に地域の医療者は専門的な緩和ケアのトレーニングを受ける機会が乏しい。本邦における大規模調査においても、緩和ケアを専門とする医療者が身近にいないことが原因で、緩和ケアに関する知識、自信が低いという報告がされている。

上記の通り、宮城県登米市周辺における在宅緩和ケア・終末期ケアの大部分の任務を担っているが、緩和ケアを専門とする医療者(医師、看護師)が不在な地域であり、専門的なスキルや知識が十分ではない。本活動を通して、同地域の在宅医療従事者の緩和ケアに関する知識や技術が向上することを目的とし、1年間を通じて専門的緩和ケア・在宅緩和ケア・終末期ケア・認知症のケアに精通した医療者を招聘し、定期的に専門的緩和ケアに関する学術的な講義を行うことを計画していた。講義の頻度は2020年度内で計4回を予定していた。

2020年4月には年間計画を立て、デモ講義を含めた計5回の講義計画を立てた。

5月：「在宅看取りを見越した疼痛の症状緩和」（7月以降の招待講義を想定：田上恵太）

7月：「終末期患者の社会福祉施設での看取りを見越した実臨床における終末期ケア・緩和ケア」（仮）

8月：「僻地で最期まで安心して生きているための社会的処方」（仮）

10月：「地域、特にへき地で最期まで家や社会福祉施設で過ごすための訪問看護のあり方、地域との協働」（仮）

12月：「集落で考え支え合う、地域に生きる一人一人のアドバンスケアプランニング、最期までこの地域に生きること」（仮）

上記計画を立案した直後に、新型コロナウイルス感染症の蔓延および緊急事態宣言が発令され、またその後も緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の発令などで、講師の移動や集合型の勉強会の開催が困難になった。笹川保健財団 事業部（地域保健）と相談を重ね、助成期間の延長を行い（最終的には2022年3月まで延長を行った）、勉強会の開催形式は3回を集合型で開催したが、1回は新型コロナウイルス感染症の蔓延状況を鑑みてインフォメーションテクノロジーを用いたweb勉強会を行った。また予定していた「終末期患者の社会福祉施設での看取りを見越した実臨床における終末期ケア・緩和ケア」は演者所属先の感染症対策のために施行が不可能となり、主催者間・笹川保険財団事務局と相談の上、コロナ禍において生と死を見つめ返す機会が増え、すでに同地域で行われてい

る「聞き書き（ライフレビュー）」と近年多くの患者に癒しを与えている似顔セラピーを融合した「この地域で最期まで生きてきた証を終末期を迎えた患者や家族と共有することでの癒しの提供と自己効力感の向上」（仮）を立案した。

最終的に下記のような日程で計 4 回の勉強会を行った。また web 開催時を除いて講演を行った翌日には、講師とやまと在宅診療所登米スタッフが実際に患者宅に訪れ、共にケアや診療（指導や地域性に関する情報交換）、また似顔絵セラピーを実施し、実地での教育活動も行った。

2020 年 10 月

「地域、特にへき地で最期まで家や社会福祉施設で過ごすための訪問看護のあり方、地域との協働」
(講師：倉持雅代氏 さくら醫院 在宅療養支援部門)

2021 年 3 月(web 開催)

「社会的処方～地方都市 ver.」

(講師：西智弘氏 川崎市立井田病院)

2021 年 11 月

「最期まで自分らしく！！～現場で活かす ACP～」

(講師：奥知久氏 奥内科)

2022 年 2 月

「笑顔と癒しの似顔絵セラピー & ライフレビュー」

(講師：村岡ケンイチ氏 似顔絵セラピープロジェクト代表)

2. 活動の成果

本来は 1 年間の間で専門的緩和ケアや終末期ケアに関する講演を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて大きな変更を必要とした。地域のケアの向上には、専門家や地域のケアギバー達と「顔の見える関係」となること、そして専門家と共に実地でケアにあたることで大きな学びや自信を得るものであり、4 回の企画のうち 1 回は web での企画となってしまったことは非常に残念な結果となった。

事前に行った対象地域の訪問看護ステーション看護師への質問紙調査(佐藤麻美子、田上恵太ら、Palliative Care Research(16):1.p79-84.2021)からは、「症状緩和」や「医療者間コミュニケーション」の困難感が強く、一般的に緩和ケアや終末期ケアに関する自信が低いものの、意欲は高い傾向であり、本企画の趣旨からは専門的な対応を専門家と共に学び、顔の見える関係を構築しながら地域の仲間と共に専門的なケアを学ぶという、ニーズに沿った内容になったと思われる。また実地に来れない医療者のために、Facebook Live を用いた講演のオンライン配信も行い、多角的な知識の共有の機会を提供することが出来た。集合型では人数制限の中の最大人数（10 名～20 名）、オンラインでは毎回 20 名程度の参加があった。アンケート調査では参加してよかった等の感想が多いが、実臨床に何らかの影響を及ぼし、ケアに関する自信や自己効力感向上のきっかけになったかどうかは、現在上記の対象地域の医療者を対象にした質問紙調査と同じ方法で検証を行う予定である。

3. 今後の課題

持続可能な地域医療・緩和ケアの発展には、地域の医療者が学ぶ機会の提供がコンスタントに必要である。昨今は web での勉強会の開催が増えてきており有益ではあるが、先述のように専門家や志を共にする仲間たちと「顔の見える関係」を構築していくことも重要である。地域の仲間達と今回の経験をもとに勉強会の主催を続けていくが、専門家を招聘できるような資金面・構造面での工夫を行っていく。

4. 活動の成果等の公表予定（学会、雑誌）

本助成の成果、また影響を及ぼしたと考えられる成果物等は以下のとおりである。現在、代表者である田上恵太と佐藤麻美子氏が主体となり、先に挙げた論文を執筆中である（下記リスト不掲載）。

2021 年第 26 回日本緩和医療学会学術大会 口演（優秀演題賞）

訪問看護師のアンケート調査による、緩和ケアの専門家が不在の地域における緩和ケアアウトリーチの有効性

佐藤 麻美子, 田上 恵太, 猪狩 智生, 佐竹 宣明, 田上 佑輔, 井上 彰

Palliative Care Research (1880-5302)16 巻 Suppl. Page S435(2021.06)

活動報告論文

緩和ケアの専門家が不在な地域における訪問看護師の緩和ケアの困難感、自信・意欲、実践のアンケート調査、および緩和ケアアウトリーチ介入点の検討(原著論文)

佐藤 麻美子, 田上 恵太, 田上 佑輔, 青山 真帆, 井上 彰

Palliative Care Research (1880-5302)16 巻 1 号 Page79-84(2021.)

2020 年第 25 回日本緩和医療学会学術大会 シンポジウム

緩和ケア均霑化にむけた緩和ケアのアウトリーチ活動を広める「愛する土地で最期まで安心して過ごす」ためにアウトリーチチームが"じもと"と共に行うこと 宮城県登米市の在宅緩和ケアアウトリーチ活動からの提案

田上 恵太, 佐藤 麻美子, 田上 佑輔

Palliative Care Research (1880-5302)15 巻 Suppl. Page S87(2020.08)

寄稿

「愛する地域で最期まで過ごす」を実現する戦略

田上 恵太, 和田 布由美, 北山 真理, 佐藤 麻美子, 田上 佑輔

医学界新聞.2020 年

https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2020/PA03370_02